



夕刊
新古典主義
五・ス・エ・ム・生
の現代新歌を贈ると混亂色
その間で三吉が
「それでは二人ばかり生捕
て連れて來る」
「チヨイ、おかねどん、小
さく呼んでおくわ」
「命令を下して、しばらくが逃げる事は出来ない。
「神妙にして、御用だ」
「ヤイ何をする」
「大體こんな風だが、新古
島崎などと云ふ吉原の大店
同様な立派な店があるんで
ある男が目についた。飛び
出で、脱ぎてある藩縫の極
端を貸す後が化物か」
「化物伊勢屋、宜くねえ萬
遊んでしまつた、貰い萬
鈴を吐かしやアがる、行け
すと、掛りてある藩縫の極
端を貸す後が化物か」

島崎などと云ふ吉原の大店
同様な立派な店があるんで
ある男が目についた。飛び
出で、脱ぎてある藩縫の極
端を貸す後が化物か

茲で二人は引き立てら
て品川の番屋に來た。其處
には此の手先の親分近江屋
常吉が坐つてゐる。

二人の入つて来るを見
て、三吉、久、振で會

「辨次、三吉、久、振で會

すよ、して見れば腕の宜い
起きやうとしたが腰が動か
ない、起きたから、フト目を覺へ
て遊んでしまつた、貰い萬
鈴を吐かしやアがる、行け
すと、掛りてある藩縫の極
端を貸す後が化物か」

「此處は化物伊勢屋と云ふ

